

タイトル：セゲド便り

留学先：Department of Physiology, Faculty of Medicine, University of Szeged

氏名：竹内 雄一

申請時の所属：東京女子医科大学 医学部 第一生理学講座

2015年9月よりセゲド大学医学部生理学部門に留学しています。セゲドは人口16万人のハンガリー第4の都市です。16万人のうち3万人がセゲド大学の学生で、若くて活気に溢れた大学の町です。セゲド大学には英語やドイツ語のコースもあるので、町では日本人を含めいろいろな国籍の留学生に出会います。

なぜハンガリー？としばしば聞かれます。成り行きです、と曖昧にすることが多いのですが、真面目に答えるならば、やりたい仕事がタイミング良くあったからです。私は神経回路のダイナミクスと行動表現との関係に興味があり、留学先として自由行動動物からの電気生理記録が学べる研究室を探していました。それまでとはやや分野が異なるため、面識が無い研究者に連絡をすることになり、面接を経て、アメリカ、スイス、そしてハンガリーが現実的な候補となりました。どの研究室も魅力的だったのですが、最終的には研究内容がその時点での私のイメージに最も近く、留学後の展開にも応用しやすそうだという理由で現所属にしました。事前にハンガリーの学会に参加して、良いサイエンスが行われていると確認できたことは、決断を後押ししたと思います。研究環境としては物流や最新情報へのアクセスなどの点で理想的ではないのですが、ハンガリーの知識層にはスマートで研究気概のある人が多く、いつも刺激を受けています。音楽などの芸術文化は非常に豊かです。研究室の前にある誓約教会内の式典で聴いたベートーベン交響曲7番は、力みのない大変素晴らしい演奏でした。教会のコーラス、祭りの踊り、オペラ人気などからも音楽が生活に根ざしていると感じます。

生理学部門では **Antal Berényi** 博士（トニー）の研究室に所属しており、彼が直接の上司です。トニーはセゲド大学医学部で学位を取得した後、アメリカ留学を機に若くして多くの仕事をトップジャーナルに発表した、非常に優秀な研究者です。彼の研究は、てんかんなど神経疾患の新しい治療法の開発を指向していて、エレクトロニクスや生物物理の知識を強みにしています。彼は研究用の計測システムなどを開発できるので、それらの販売会社も経営しています。私は彼と、側頭葉てんかんの発作をオンデマンドに制御する手法の開発に取り組んでいます。研究室のメンバーは、トニーと私の他に、大学院生が2人、学部学生が4人、技術支援員として私の妻で、合わせて9人です。研究室内の公用語は英語ですが、今はハンガリー人メンバーが多くなったので、ハンガリー語ができないと不自由を感じるがあります。メンバーの出身は、医学、生物学、物理学、情報学、数学など様々です。私は元々薬

理学出身で学位も生理学なので wet な実験屋なのですが、現在のプロジェクトに関連してエレクトロニクスなど dry な工学寄りのスキルも必要になり、それらが得意なメンバーから習得しているところです。彼らも私のスキルが必要なことがあるので、互いに助け合っています。この様にヘテロな集団内で働いていると、一つの科学的課題へのアプローチは研究者により様々で、自身のスタイルは多くの選択肢の一つに過ぎないということに気づかされます。そうして最近、自身の神経科学領域内での立ち位置や得手不得手が良く分かるようになり、今後どのような方向性で進むべきか見えてきました。これは留学して一番良かったと感じる点です。

実際の研究面以外でも、異なる文化的背景を持った同僚と過ごすことは大変刺激的です。それまで当然と理解していた価値観や判断基準が全く通用しないことは、しばしばです。初めの頃はいちいちストレスを感じていましたが、近頃はコミュニケーションで想定外の事態が生じて、そういうものか、と受け流せるようになりました。日本的な考え方を相対視できるようになったのだと思います。加えて妻と日本を離れてこのような体験を共有できることは、素晴らしいことだと実感しています。これから留学される方にも、なるべく家族と一緒に出国されることをお勧めいたします。また研究の傍らセゲド大学で生理学を教える機会も得まして、日本生理学雑誌の教育セクションに寄稿いたしました。Web で無料公開されていますので、興味のある方は是非ご覧ください (Vol. 79, No. 1, p 8-15)。最後になりましたが、本留学をご支援下さいました上原記念生命科学財団に心より感謝申し上げます。帰国後は、この経験を後進に還元したいと考えております。



上司のトニー宅にて

誕生日にハンガリーの料理本を頂きました。